

ほとけの 混和会だより

令和四年五月
東光院
仏の混和会
第159号

左記の言葉「共生」は

平成二十八年九月十六日

天台座主 故森川宏映様が
パチカンに於いてローマ教皇
と面談された折に掛け軸に
記し送られたお言葉です。
各国の紛争や人と人との
争い。危機的状況下に於か
れている地球環境、このよう
な状況下に於いて、「共生」
この言葉は、最も大切な
お言葉かと思えます。



芳躰

共生

天台座主宏映

人生は悟りを求めての旅 No.4

『生命』

生かされる命

共に生きる永遠の命

私達は毎日、植物の命や、
牛、豚、鳥、魚など様々な命を
頂いて生かされて居ます。
そして他の命も、私達と同じ
ように植物や牛、豚、鳥、魚、
様々な微生物に至るまで、
共に他の命を頂いて生かされて
おります。

大宇宙に於いて、奇跡的に存
在する生命を宿す地球。

この地球の営みの中で太陽の恵
みや雨や風、この微妙なバラ
ンスの中で様々な命は、共に他の
命を頂き、「共生」の世界に於
いて共に生かされております。
けっして人類だけで生きる事
は出来ません。他の命のおかげ
で生かされて居るのです。

危機的状況下に於かれてい
る私達の生活環境、「国と国」、
「人と人」そして「自然と私
達」、大変難しい課題ではあり
ますが、「共生」これは必要不
可欠な課題かと存じます。



最澄様の言葉
一隅を照らす

慈悲の御心を育む道場として
比叡山を開かれた最澄様は、
弘仁十三年六月四日五十六歳
の生涯を閉じられました。

その慈悲の御心を育む人生の
指針と成るように、最澄様は
「一隅を照らす」と言う言葉を
残して下さいました。

この一隅を照らすと言う言葉
は、慈愛心を懐いた人が、ただ
そこに居るだけで、みんなの心
が安らぎその場の空気が明るく
照らされる。と言う意味です。
そのような慈愛心を育む為に
『生命』・『奉仕』・『共生』と言う
人生を歩む、三つの柱とする
言葉が掲げられております。

『生命』とは、
「人間には死ぬことと同じよう
に、避けられないことがある。
それは生きることだ。」と

チャップリンの映画
『ライムライト』の台詞に記され
て居るそうです。

人は生まれていつかは死ぬ運
命にあります。しかし今を生
きなればなりません。

人は「何のために生きるのか」
などと自問自答して行くと、
次第に己の仏心、この慈愛心の
布施が人々の心に浸透し継承
されて「永遠の命を生きる」と
言うことが見えて参ります。

『奉仕』とは、大いなる慈愛心。
誰かに情けをかける。しかし
その行為に對して、見返りを
求めたり、恩に着せたりした
時、その行為が原因と成って大
きな災いと成ってしまいます。

「奉仕」とは無条件の愛であり、
徳を育む布施の実践行です。
『共生』とは

私達の住む地球は、地球の
温暖化、森林破壊、砂漠化、
異常気象など地球環境の破壊
が大きな問題となっています。
人間は元より様々な生命
は、豊かな自然環境が無けれ
ば生きられません。自然の営み
に守られ、共に他の命を頂いて
生かされて居ます。

自然を大切に、他の幸を念
じ、他の命を敬い無益な紛争や
殺生を
慎みたいと
存じます。

亮観拝

合掌





日本仏教に登場する仏様を毎号少しずつご紹介。口から仏様が出ている僧侶の像は仏教に詳しくない方でも一度は目にされたい事があるでしょう。

その僧像が半世紀ぶりに東京国立博物館へ訪れた為、先日足を運んで参りました。今回はその僧侶をご紹介します。

● 空也上人

（九〇三〜九七二）
空也は自身の事を多く語らなかつた為、出自については解っておりません。没後に弟子達によってまとめられた「空也誄」(伝記の様な物)によると、若い頃に自ら剃髪をし「空也」と名乗り熱心な仏教信者として修行の為全国を巡られていたそうです。

九三八年、平安京へ登ります。当時の都には度重なる震災と戦により疲弊させられた方が多く居られました。そうした人の溢れ



京都府 六波羅蜜寺 蔵
空也上人立像

る刑場近くにあり、市を扱点とし托鉢を行い、与え物には仏か貧しい人へから「市聖」と呼ばれ、その事から慕われていました。そうした空也の行いに感じ入り当時の天台座主は空也に戒律を授け、正式な僧侶とされます。

九五一年、現代の様に大勢が亡くなる疫病が都中也は苦しむ人々の為、自らの命も顧みず亡くなった方を火葬し、新しい井戸を掘っては病人を介抱し、穏やかな世を願い念仏を称え続けました。

生涯特定の宗派に属する事も無く、常に病や戦で苦しむ人と同じ場所、同じ目線で行動を共にし、寄り添い生きて僧でした。

さて、有名な僧像は没後二五〇年に造られた像で口から出る六体の仏は称えた「南無阿弥陀仏」の六文字が仏の姿に変じた様子を表しており、

実際に像を目にした時、空也上人の生きた時代と現代とが重なり、その顔がどこか哀しげに見え、いつも安全な所でニュースを眺めるだけの自分の小ささを痛感致しました。



正義と言う旗印の紛争



プーチンの正義 ゼレンスキーの正義 バイデンの正義 習近平の正義

人類は、自己の野望によって今も昔も、あいまいな正義を旗印に数千年もの間紛争を繰り返しております。

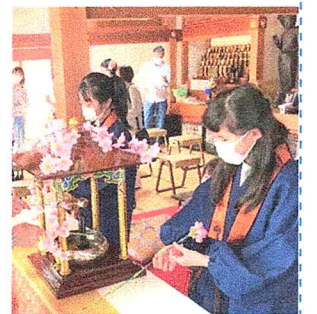
二千五百年前の釈尊の時代も同じでありました。

釈迦国の人々は隣国コウサラ国の侵略に何時も不安と恐怖を懐いておりました。

そこで釈迦国の王子様は、世界の人々が平和と安心に満たされる道を求め出家されて「ブッダ」と成りました。

以後、コウサラ国の王様は「ブッダ」に帰依されて侵略を止めたそうです。

ブッダの「慈悲と言う正義」かと思えます。



4月10日(日曜)
お釈迦様の誕生会を致しました。

『釈尊誕生会、花祭りに参加して』 鈴木知子

釈尊の誕生会花祭りに始めて参加致しました。今回、私の娘と友人の娘で、お花を皆さんにあげるお手伝いをしました。

お釈迦様は七歩、歩まれて人々を慈しむ仏心を会得された事を教わりました。

私達も七歩歩んでみんなの幸を祈りお花を上げました。

又歌を歌ったりお釈迦様の紙芝居を見たり、科学のおじさんが子供達に科学の楽しさを教えてくれたりとても楽しかったです。

来年は中学生なので今回のお手伝いが最初で最後に成るかもしれませんが、貴重な体験が出来て本当に良かったです。

亮観さんにはいつも感謝しております。又花祭りには参加したいと思っております。

有り難う御座いました。